

はじめに

学科長 鈴木 元

本学の日本語日本文学科は、普段、私たちが何気なく使っている日本語という、「ことば」を手掛かりとして、人間の営みを探究しようとする学科です。

近年では、とかく実利性ばかりが、偏った形で追究される社会となり、そのために、「ことば」だの「人間」だの探究といえば、自己満足と趣味の世界、とみなされがちです。

しかし、ある時はあふれる思いに胸躍らせ、時に己れの心の内を覗き込みつつ沈思し、時に人間関係に一喜一憂する生身の人間が集まり、相互の関係の中で構成しているのが、現実の社会です。そして、ことばこそが、人と人との架け橋となるものです。ことばを通じての人間の探究は、必ずや社会に寄与するはずですし、大学での学びと研究としての「文学」が、社会から遊離してよいはずはありません。

本学科がめざすのは、自己満足と閉鎖性に生きる夢想家の育成ではありません。現実の大地を踏みしめ、しかし理想や夢は棄てず、自分の眼で世の中を見、自分の頭でものを考え、ことばの力を信じて世に処していくことのできる、そんな人間の育成です。

さらに その先を目指す方へ — 大学院の指導体制 —

私たちの日本語日本文学科は、「熊本県立大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻」という、博士前期（修士）課程から博士後期（博士）課程に至る大学院（研究科）を擁しています。各々の研究分野で活躍する教員の指導のもと、この九州の地から新たな研究成果を世に問うていきませんか。

学部において一定以上の成績を取っていれば大学院進学時の入学金が免除になるほか、学会発表を行う際に支援金の補助を得られるなど、各種のサポート体制が整っています。

ニチブン

「日文」で学ぶ4年間

日本語日本文学科(通称日文)での入学から卒業までの道筋を紹介しましょう。

主な専門科目とカリキュラムの流れ

学科の授業は、下級生向けには、基本的なもの、広い範囲を扱う「概論」や「基「演習」や「特殊研究」が多く配置されています。

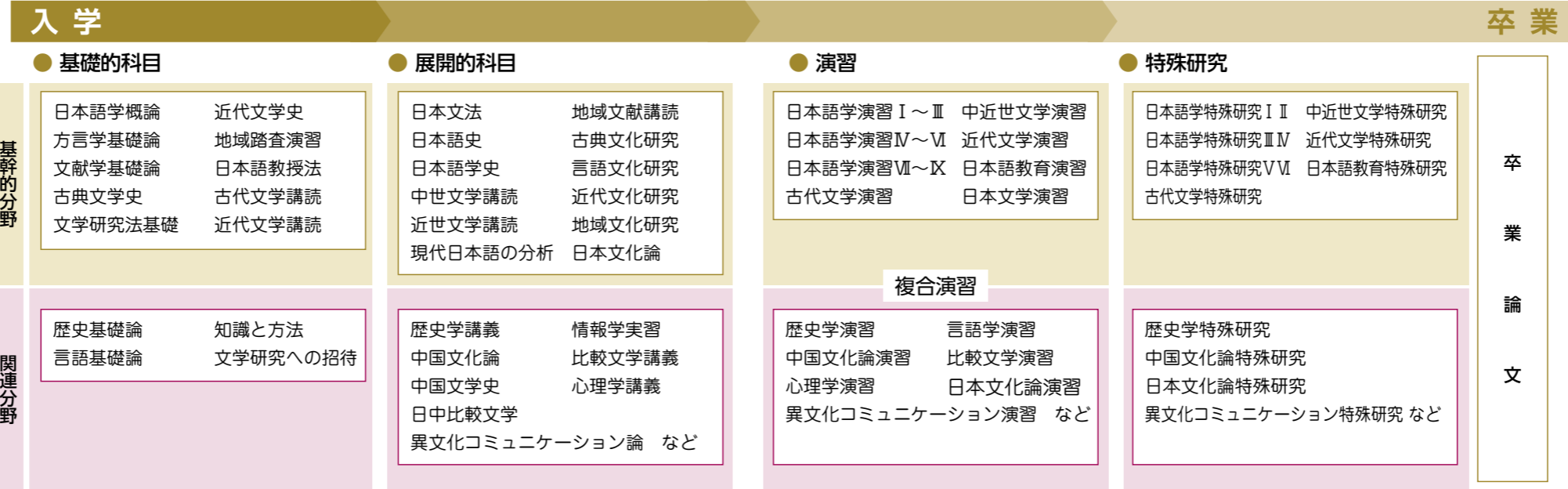
「概論」や「基礎論」などで基本的な知識や方法論を身に付け、次に「演習」を積み、さらに「特殊研究」において教員の専門とする分野の細かい指導を受ける

基礎論」、上級生向けには、特殊な問題を深く掘り下げる

において研究対象を深く掘り下げて考える実践的訓練しながら卒業論文を作成する、という手順です。

*注意

下記の図は科目の種別による大まかな見取り図を示したもので、各学年の配当年次には対応していません。正確なカリキュラム表は大学案内などを御参照ください。



卒業論文発表会

5つの卒業履習分野

日本語もしくは、日本の文学作品の研究が基本となりますが、各自の関心や比重の置き方によって卒業論文の作成に当っては、5つの分野の中から自分にあったものを選んで論文を書きます。

日本語の特質、
歴史などを研究したい→**日本語学**

日本の文学作品、
その背景などを研究したい→**日本文学**

外国人に日本語を教えるための
技術を研究したい→**日本語教育学**

地域の言語や文学・歴史などを
重点的に研究したい→**地域文化**

中国文化、歴史学、日本文化、
異文化コミュニケーションなど、
様々な隣接分野と
関連づけて研究したい→**人文学**

多彩な「演習」

本学科の「目玉」とも言える演習。一つの文献を定め、その一言一句にこだわって精読したり、海外での日本語教育実習を通して実践的な技術を磨いたり。演習の主役は学生です。これまで開講された演習の一端を紹介しましょう。

日本語学・日本語教育

- 文法研究の手法
- 仏教説話集『沙石集』の語学的分析
- 現代日本語の音声と音韻分析
- フィールドワークによる言語調査
- 韓国・インドネシア等での日本語教育実習

日本文学

- 『源氏物語』の表現分析
- 室町の百韻連歌を読む
- 仮名草子『きのふはけふの物語』精読
- 芥川龍之介初期作品精読
- 球磨の俳人 井上微笑の新出資料精読

人文学・地域文化

- 中国志怪小説『夷堅志』読解
- 江戸時代に編纂された名将伝の読解
- 明治期編纂『琉球語』の編纂過程
- 天草市上田資料館所蔵典籍・文書の調査

ゴールとしての「卒論」

学生のゴールは卒業論文(卒論)です。関心がある分野の「特殊研究」において教員の指導を受けつつ400字詰原稿用紙にして50枚前後(約2万字)の論文を執筆します。論文を書くとは、オリジナルの知見や分析を元に新たな学説を立てることです。完成まで、それまでに得た知識・調査手法・プレゼンテーション能力を総動員する厳しい日々が続きます。最近の卒論タイトルをいくつか紹介しましょう。

日本語学・日本語教育

- 徳富蘆花『不如帰』内連体助詞「が」の特殊性
- 近世における「フピン」の意味・用法について
- 熊本県菊池郡大津町方言における待遇表現
- 添加の接続詞「そして、それから」の用法について
- 「楽しい先生」についての一考察
—形容詞の連体修飾用法に関する容認性判断調査を通して—

日本文学

- 『源氏物語』の六条院崩壊と「冬の町」—明石の御方の異界性を契機として—
- 古代、中世における「人魂」観
- 『雨月物語』「目ひとつの神」論
- 夏目漱石『こころ』における「明治の精神」とは何か
- 宮沢賢治「十力の金剛石」論

人文学

- 唐以前の中国における桃の受容について
- 〈黒船〉言説の誕生
- 山東京伝『化物和本草』考—陳列される化物—

研究力を社会で磨く 社会に活かす

机に向かって本を読むことだけが、大学の勉強ではありません。
地域との積極的ななかかわりの中で、「生きた知識」の構築を目指します。



天草ジオパークと「やさしい日本語」プロジェクト
(天草市立御所浦白亜紀資料館)

●地域委託研究 ——菊池市の和本調査など

日文科では地域連携活動を重視しており、多くの研究室が様々なフィールドに出かけています。ここではその一つ、平成24年度に歴史学研究室が着手した菊池市の和本調査を紹介します。

現場では埋もれた1,176冊の和漢籍を発掘し、まず学生とともに書誌(本の情報)を取りました。次に和紙の葉を用いて仮番号を各冊に付し、最後に中性紙でできた箱に収める、といった整理作業を行い、本の出納を可能にする体制を整えました。これらの書物は平成29年11月に開館した生涯学習センター内の古文書室に収められ、今後市民に提供される予定となっています。

なお、これまでの書誌採録の成果を『菊池市生涯学習センター蔵和漢籍分類目録』(平成30年3月)にまとめ、和漢籍の全貌を学問的に明らかにしました。また、この活動は社会的にも認められ、新聞紙上にも取り上げられました。

その他、日本文学研究室、日本語学研究室、日本語教育研究室も、水俣市、八代市、人吉市、天草市、熊本市などで活動しています。積極的な学生は学内の演習などで培った能力を生かしつつ2つ3つと活動を掛け持ちして、他では味わえないような学生生活を満喫しています。

コロナ禍の現在、これらの活動の多くは縮小や中断を余儀なくされていますが、感染収束後の再開を目指し、各方面との調整が続いています。



演習における方言調査



菊池市での和本調査

●読書感想文書き方指導

文学・語学を学び蓄えた知識を活かし、毎年度の夏休みに熊本県立八代中学校との連携で読書感想文の書き方指導教室を実施しています。

人によっては書くことそのものが苦痛な読書感想文です。満足のいく感想文の完成まで緊張感を持続してもらうにはどうすれば良いのか、という観点に立つことが大切になります。また、説明を試みる中で、普段は気づかない文章表現の難しさを改めて実感するなど、学生自身もさまざまなことを学ぶ重要な活動となっています。



多彩な教員陣

日本語日本文学系では西日本屈指の充実した教員数を誇るわが日文。
各教員の研究室を覗いてみましょう。

日本語学(文法研究)

言葉にこだわり、筋道を探す

半藤 英明 (Hideaki Hando)



日本語の「助詞」を研究する者として、最も注目する(してきた)のが「係助詞」です。係助詞は、日本語の表現において基幹的な構文を作ります。係助詞が文法上、極めて重要な働きを負っているのです。この決定的な結論を得るまでに、数々の研究の積み重ねがあります。そしてその研究の厚みを目の当たりにすると、個々の人間たち(研究者たち)が形作った努力の営みに敬意を払いたくなります。

係助詞と関連の深い文法現象が「係結び」です。係結びを考えると、まず、係結びを起こす助詞が係助詞であるのか、係助詞が係結びを起こすのか、が問題となります。前者のように「係結びを起こす助詞が係助詞」であれば、文末の活用形を拘束する「ぞ・なむ・や・か・こそ」以外のものは係助詞になりません。また、後者のように「係助詞が係結びを起こす」のであれば、従来は係助詞とされる「は・も」が係結びを起こさない理由を明示しなければなりません。

ものごとを順序立てて論理的に考える(そして説明していく)ことは、パズルを組み立てるように、何とも楽しい生きがいの時間です。

日本語学(語彙史・文字史及び辞書史研究)

研究者水準の洞察力を

米谷 隆史 (Takashi Yoneya)



ことばの力を感じることは濃淡こそあれ誰でもできますが、その「感じ」が何故にもたらされるのかを考えて説明するには修行が必要です。残念ながら、お金を払ってまでその修行を積もうとする人はあなたを含めて世の一握り。さらにこの一握りは、実際の働き口が何であれ、今と将来のことばに少しだけ強い責任感を持つことが求められる損な役回りです。

努力して博士号まで取得しても、それに見合った就職先は存外に少ないとの状況がよく報道されます。これに加えて少子化・大学の淘汰まで叫ばれる時代に、九州の真ん中の地方大学が博士課程までを擁して研究者を養成(しかも文学・語学研究で!)するようなカリキュラムを維持しているのはあらゆる面で無駄だという声がどこから聞こえてきそうです。しかし、一握りが一すじになっても良いのでしょうか。世の中の正邪や好悪の「感じ」は多くことばに乗ってやってきます。日文の洞察力を身につけた皆さんが力を発揮するのは、大好きなことばや物語を分析する時だけではないと信じています。

日本語教育・第二言語習得

複雑な言語習得という現象をより客観的にみる

秋葉 多佳子 (Takako Akiha)



私は日本語教育関連の科目を担当し、言語の習得についての研究を行っています。言語を習得する過程には、学習環境、好みの学習方法や学習ストラテジー、他の外国語の学習歴、母語の熟達度など、非常に様々な要素が複雑にかかわってきます。そのため、たとえ同時に言語の学習をスタートしても、学習者によって習熟度に差が生じるのです。

私はこのような複雑な言語習得という現象を、より客観的に見ようとする研究を行ってきました。例えば、より効果的な学習方法を探るための実験では、実験に参加してもらう学習者の母語、母語の習熟度、日本語の習熟度、学習環境を統一した上で実験を行い、統計を用いて分析を行いました。これまで行ってきた言語習得の研究からは、母語の違いによっておこる文法習得における誤用や文法の効果的な学習順序など、実際の教育場面において示唆を与える知見が得られています。

日本語教師を目指す学生さん、そして、言語習得をより客観的に研究してみたいという学生さんは、ぜひ私の研究室と一緒に勉強しましょう!

日本語学(方言学、社会言語学)

ことばに潜む規則性

小川 晋史 (Shinji Ogawa)



ことばには決まりや約束ごとがあります。それがあからさまに会話で成り立つのですし、自分の知らないことばについては、その決まりを知らないからこそ理解したり使ったりすることができません。ことばの中でも主に現代日本語を扱うわけですが、一口に日本語と言っても様々で、いわゆる標準語と方言では異なった決まりがあったりします。そのような決まりや法則性を探ってみるのはとても面白いことです。例えば、ドアを閉める音を表すのに「パタン」と「パタン」では前者のほうが荒々しい閉め方をした印象を持ちます(『音象徴』と呼ばれる分野)。九州の多くの方言で、質問するときに「今日、来ると?」とは言っても、「これ、ラーメンと?」と言うのには抵抗を持つ人が多いです(方言における疑問の「と」の使い方)。日本語を使うとき、知らず知らずのうちに何らかの決まりにしたがっているわけです。このような、ことばに関する決まりに興味を持って、解き明かしてみたいと思う学生さんは是非お越しください。

多彩な教員陣

中世文学

文献を通して人間の深みへ

鈴木 元 (Hajime Suzuki)



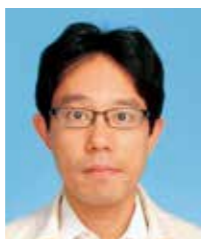
もっぱら鎌倉期以降の古典学を専門としています。古典の研究とは、ごく簡単に述べるならば、江戸時代以前の文献を掘り起こし、書物としての状態を調べ内容を読み解き、史的にそれを位置づける作業といえましょう。もちろん、その文献の中心には文芸テキストが位置を占めています。

かつては、文学とは極めて私的な営みとして、大学の教育においても研究においても、「楽しければそれでよい」と素朴に考えられてきました。学問の探究とは知的欲求に萌すものであるという前提からすれば、出発点はそれでよいかもしれませんが、しかし、それで終わってはいない無用の烙印を押され、いずれ公教育の場から退場を余儀なくされるでしょう。文学を通して、あるいは古典を介して何をめざすのか、我々は日々考え続けなければなりません。それこそが、人間探究の学の、現代における存在意義だと思っています。

近代文学

このクラスに解釈はありますか

五島 慶一 (Keiichi Goto)



芥川龍之介を中心に日本近代文学の研究・授業を行っています。近代文学で一般に最も重要と考えられるのは作品の解釈です。解釈とは？ 小説から作者の意図を見出すこと？ 未だにそう考えているのであれば、あなたは文学の面白さの半分も理解していないこととなります。解釈とは、自分なりオリジナルの〈読み〉を提示することです。作品に書かれている事柄から、またさまざまな周辺材料を集めつつ、作品を自分なりに意味づけ、それを論理的筋道をもって再構成して示す——研究ではそれを「論」と呼びます。論を立てるのは自分と作品との一対一の真剣勝負であり、同時にそれは観客（読み手）を意識した試合でもあります。優れた論は、時にその対象となった作品以上に面白い読みものとなりえます。私の研究室では、各自が選択した対象（作品）に対して独自かつ説得的な解釈を見出すべく、多くの先輩たちが日々楽しげに頭を悩ませています。「楽しく悩む」？ その一員になればあなたにもわかりますよ。

古代文学・近世文学

選考中



古代（奈良・平安）及び近世（江戸）の文学を専門とする教員をスタッフに加えるべく、現在選考を進めています。2022年4月には、古代・中世・近世・近現代の全ての時代を網羅する陣容が整う予定です。

選考が完了し、古代文学・近世文学 各1名（計2名）の研究者が2022年4月より新たに着任することが決定しました。

中国思想史

中国の文字と文化の世界

山田 俊 (Takashi Yamada)



文学部日本語日本文学科の山田俊です。中国の三教思想交流を研究しています。三教とは儒教・仏教・道教を指し、この三教はそれぞれの時代の状況に応じて互いに影響し、競争し合いながら発展し、今日に至る中国の思想・文化を形成しています。その歴史を古典文献を正確に読み解くことで解き明かすことを目指しています。また、この三教思想交流は中国古典文学にも大きな影響を与えてきました。大学の授業では六朝志怪小説、唐宋伝奇小説などの、中国の古典小説を学生と一緒に読解し、また、それらの日本文学・文化との関わり等の観点から卒論の指導を行っています。

中国の古典思想・文学・文化、そしてその日本との関わりに関心のある方が本研究室に来られることをお待ちしております。

歴史学

江戸に今を見る

大島 明秀 (Akihide Oshima)



「歴史」を知るということは、いかなる営みなのでしょう。

一つの答えとして、「過去」という鏡をもって「現在」を見つめ、そして「未来」を構築するための取り組みだと言えるでしょう。また別の角度からは、歴史はあくまで人間の手になる〈物語〉で、「歴史の描き方」にはその時々（現在）のアイデンティティが投影されるものとも見る事ができるでしょう。

私は過去に対する飽くなき関心と、現在への強い問題意識から歴史学を研究しています。専門領域は近世（江戸時代）ですが、ゼミでは、日本文学や日本語学と関連するテーマであることを前提としますが、江戸時代だけでなく、明治以降、さらには日本とヨーロッパの交流を対象とする方も歓迎しています。また、菊池市をはじめとして、各地域に眠る江戸時代の古文書や和本を整理したり、その技術を身に付けるための古文書講座を開催したりもしています。一人でも多くの学生が、実物と触れ合いながらアクションする歴史学に参加してくれることを願っています。

日本芸能文化論

剣劇研究への招待

羽鳥 隆英 (Takafusa Hatori)



新任教員の羽鳥隆英です。早稲田大学や新潟大学を経、熊本県立大学に着任しました。専門は日本芸能論、特に剣劇研究です。2020年にアニメ映画版が興収記録を樹立した『鬼滅の刃』、2021年に実写映画版が完結した『るろうに剣心』、剣豪・宮本武蔵が主人公の『バガボンド』などの人気が例証する通り、私達の身の回りには現在、マンガ・アニメを中心に、刀剣の闘争に身を投じた人間の物語＝剣劇の流行が見られるようです。2019年に歌舞伎版が初演された『風の谷のナウシカ』も帯剣した「姫」の物語でした。

私は現在、このような最新の剣劇群を日本芸能史に学術的に位置付けるべく、試行錯誤を重ねつつあります。この数年、特に集中的に調査したのは劇団「新国劇」（1917年 - 87年）の歴史です。新国劇の初代座長・澤田正二郎は刀剣の闘争に、当時の演劇界の主流である歌舞伎とは異質な運動の迫真性を導入し、剣劇の可能性を拡大しました。1919年、澤田と劇作家・行友李風を中心に生み出された『国定忠治』『月形半平太』などの演目は、1929年の澤田歿後も再演が繰り返され、剣劇の古典に磨き上げられました。

澤田の挑戦は後発の芸能である映画にも刺激を与えました。当時は検閲制度が存在したため、映画は社会の歪みを明示的に描けませんでした。この制約下、伊藤大輔などの気鋭の映画人は剣劇に可能性を見出します。抑圧された人間が刀剣の闘争に身を投じる有様を情熱的に描き、社会の歪みに暗示的に異議を唱え、観客の支持を得たのです。伊藤が1930年前後に発表した剣劇群は長年、映像が散逸したままでしたが、幸運にも『一殺多生剣』『斬人斬馬剣』などの現存が確認され、国際水準の前衛性が再評価されつつあります。

この通り、剣劇は時々々の芸能や社会の状況と関連しつつ、自身の歴史を更新してきました。逆に言えば、歴史を踏まえつつ最新の剣劇群に向き合えば、現在のマンガ・アニメ愛好家が剣劇に何事を期待するのか、何故に刀剣の闘争に惹かれるのか、このような問題を巡る議論を深化し得るはずで、簡単に結論は出ませんが、一緒に試行錯誤し得れば幸甚です。

○教員の近著紹介

- ①大島明秀【著】『細川侯五代逸話集—幽斎・忠興・忠利・光尚・綱利—』熊本日日新聞社（2018）肥後細川家初代当主幽斎から五代綱利治世までの逸話集「随聞録」全55話の現代語訳と原文（校訂版）。資料解題のほか、歴代当主と家臣の意外な行状の背景が読み解けるよう各話に解説を付した。
- ②小川晋史【編著】『琉球のこぼの書き方—琉球諸語統一的表記法』くろしお出版（2015）北は奄美から南は八重山まで、汎用的な表記法の定まっていなかった琉球諸語について、複数研究者の協力により新たな表記法の提案を行うとともに、個別方言の表記例を示す。
- ③鈴木元【著】『室町連環—中世日本の「知」と空間』勉誠出版（2014）和歌・連歌・お伽草子等々、多様なジャンルの作品が華開いた室町世。時代の中を生きた文藝の姿を、宗教、学問の背景と併せ解き明かす。
- ④羽鳥隆英【著】『日本映画の大衆の想像力—幕末と〈股旅〉の相関史』雄山閣（2016）近代日本の起点に位置する幕末＝明治維新を、映画や演劇などの芸能が如何に表象したかについて、メロドラマ研究の『善悪』『悲哀』の概念を援用しつつ検討する。
- ⑤半藤英明【著】『日本語基幹構文の研究』新典社（2018）係助詞「は」「も」「こそ」による文を日本語の基幹的構文と位置づけ、主述関係など、さまざまな事象に文法的な説明を施す。
- ⑥山田俊【著】『宋代道家思想史研究』汲古書院（2012）朱子学の祖である朱熹の出現前後における老荘（老子・莊子）思想受容の展開を、各時代に主要な論点であった「無為」と「有為」、「本然」と「氣質」等を切り口に分析する。